

元禄歌舞伎のやつし

——女方の「やつし」に注目して——

戸塚史織

一、はじめに 歌舞伎の「やつし」

『廓文章』と呼ばれる演目がある。主人公伊左衛門は大坂きつての豪商藤屋の跡取り息子だが、夕霧太夫と深い仲で店の銀を入れ揚げ勘当されてしまう。そんな落ちぶれた身になっても夕霧に会いたくて、寒い中紙子に編笠姿で彼女の元に向かってくる。このように零落した姿に身をやつし女性（傾城）に逢いに行く姿が一般的に「やつし」と言われている。

歌舞伎研究の世界では、「やつし」を身分の変化やそれに伴うアイデンティティの両義性¹に関連付けて説くことが多い。佐藤の「元禄盛期の江戸のやつし芸は、身分の高い者が好色の結果零落し、または敵を狙うなり主人の行方を尋ねるためといった方便で市井に落ちて、下さまの町人や職人に姿を変え、その変えた身分を演じる芸だとみていいと思う。設定の場は廓場や貧家のほか神前、路上等で、多くは「濡れ」と笑いの局面が備わっている。」²

という定義が簡明である。

このような「やつし」については、歌舞伎の第一の隆盛期、元禄歌舞伎期を象徴するものとして捉えられ、この時期を中心に研究が重ねられてきた。先行研究を分類すると、大きく三系統の研究がある。

第一に「やつし」の起源についての研究である。ここでは郡司³や乗岡⁴による民俗の心意や貴種流離譚という説話類型と関連付けたものや、佐藤⁵や今尾⁶らによる当時の社会状況との関連から考察したものが見られる。

第二に立役の「やつし」についての研究がある。従来、大半の「やつし」研究は夕霧狂言の伊左衛門のような、零落した姿で女性に会いに行くという坂田藤十郎の「やつし」を取り上げていた。しかし土田⁷や荻田⁸らは坂田藤十郎以外の立役の「やつし」に注目することで、実際の「やつし」は傾城買を中心とした内容のものだけではなく、様々な生業に身をやつすという「やつし」があったことを指摘した。

第三に「やつし」の分類についての研究がある。主な分類としては萩田、板谷によって展開された、続く濡れ事を盛り立てる「ぬれのやつし」、生業としての「土農工商のやつし」が定着している。また近石が浄瑠璃の「やつし」に着目し「やつし」を分類しているほか、佐藤は「やつし」を芸と手法に分けて考え「替つた思ひ付き」や「新しきしだし」という新鮮な趣向のためにある」という「手法のやつし」を提唱した。加えて、元禄二（一六八九）年頃成立したと考えられる歌舞伎の理論書『舞曲扇林』に記された「やつしといふは、方便にいやしき業をするか、世におちてするか、此二ツ也」の記述が引用されることも多い。

これらの先行研究を検討すると、「やつし」研究の対象が立役者に集約されていることに気づく。歌舞伎の基本的な役柄には延宝・天和の頃に完成した立役・敵役・道化方・親仁方・若女方・若衆方・花車方・子役の八種があり、さらにこの基本的役柄から分化した半道、実悪といった役柄も元禄までに出現している。それにも関わらず立役以外の「やつし」については具体的な検討が見られない。他の役柄は「やつし」に取り組まなかったのだろうか。状況を確認する必要がある。

二. 立役以外の「やつし」

まず立役以外の役柄の「やつし」の状況を確認するため、元禄期の役者評判記から「やつし」の用語としての使用例を拾うこと

とする。

評判記は歌舞伎上演資料の一つで、現代では演劇雑誌にあたるものである。長年にわたり役者の芸技評を行なっており、ジャーナリスティックな性格が他の出版物よりも強く、当時の人々が見た歌舞伎の演技についてかなり正確な情報が担保されている。先行研究では現代の価値観で「やつし」を判断する例も散見されるが、本稿ではあくまでも当時の「やつし」を検討材料とすることを重視し、また時期については元禄歌舞伎期を中心にした検討を考え、「歌舞伎評判記集成第一期」一〜四巻に収録された万治三（一六六〇）年『野郎虫』から正徳二（一七一二）年『役者千石通』までの八十六冊の評判記を対象とした。

語彙素が「甕す」「甕し」になるものを抽出したところ、語として八二五回、評として五三八件抽出でき、一九三名の役者が「やつし」の語で評されたことを確認出来た。一九三名の役者の内訳は立役九十七名、女方六十名、若衆方十一名、敵役十一名、道外方五名、半道二名、親仁方二名、花車方二名、不明三名だった。確かに従来注目されてきた立役が五十パーセントを占めているものの、その他の役柄も「やつし」に取り組んだことが確認出来、特に女方は三十一パーセントもの割合を占めている。

さらに抽出した評文を年代順に見ていくと、最初に「やつし」の語が現れるのは寛文六（一六六六）年頃と推定される『難野郎古た、み』で、若女方と目される玉村吉弥の評である。ただしこれは佐藤の指摘する「手法のやつし」に分類されるものであり、

その点には注意が必要である。その後かなり間が空いて十七年後、天和三（一六八三）年『難波の兒は伊勢の白粉』若女方上村辰弥評（一五八）¹⁹があり、貞享三（一六八六）年『難波立聞昔語』で立役の嵐三右衛門（一九九）、竹嶋幸左衛門（二〇五）、山下半左衛門（二二三）、岩井半四郎（二二三）各評及び若女方上村辰弥評（二〇〇）に「やつし」が見られるようになる。つまり最初期には「やつし」の語が立役に先行し女方の評に用いられているのである。

続いて演技・演出上の局面や役々の演技パターンにまで発展した「やつし」を指す「やつし事」²⁰の語に注目する。鳥越は「元禄初年までは、種々の「事」をよく演じ得る役者が名優であった」が「次第に広範囲な演技よりも自分一己の得意な「事」を必要とし、それを持つている役者を名優とするようになった」と指摘している。そうであるならば役者達は「やつし」についても「事」として認められた「やつし事」を目指したはずであり、評の上では「やつし」ではなく「やつし事」の語で評されているということ。これは「やつし」が其の役者の一演技として認められたと考えられる。「やつし事」の語が評に用いられる最初は貞享四（一六八七）年『野良立役舞台大鏡』大坂の嵐三右衛門（二二五）、竹嶋幸左衛門（二四三）、大和屋甚兵衛（二四五）、市村四郎次（二五〇）、及び京の浅田久四郎（二六〇）評であり、いずれも立役である。その後もしばらく立役のみに見られる語のままであり、立役以外に「やつし事」が見られるようになるのは元禄六

（二九三）年『古今四場居色競百人一首』江戸の若衆方と目される宮崎式部評（二六八）で早く、女方では元禄七（一六九四）年『役者節用集』江戸の谷島主水（二五六）、荻野沢之丞（二七七）、袖岡政之介（二七九）評で初めて確認できる。このことから「やつし」という語での評は女方が他の役柄より先行していたが、演技パターンを指す「やつし事」としての評は立役が先行し、若衆方や女方など他の役柄は六年以上遅れて獲得したことがわかる。しかしこれ以降は継続的に「やつし事」の語を確認でき、演技パターンへと発展した「やつし」もまた、立役のものでは無かったことが指摘できる。

以上の事から、従来研究対象とされてきた立役以外の役柄も「やつし」に取り組んでいたことが確認出来た。特に女方は、立役に次いで多く「やつし」の語で評されており、演技パターンとしての「やつし事」をも獲得している。それでは女方の「やつし」は具体的にどのようなもので、どのような特徴があったのだろうか。

三. 女方の「やつし」

立役に次いで「やつし」の評を多く持つ女方の「やつし」について検討する。最初に女方の「やつし」の全体像を確認する。

「やつし」の語を評に持つ女方は六十名確認出来、語としては一四七回、評として二〇〇件抽出された。特に多く「やつし」の

語で評される役者としては、霧波千寿（十一回・六件）、芳沢あやめ（九回・八件）、水木辰之助（八回・八件）、中村千弥（八回・五件）、荻野沢之丞（七回・七件）がいる。いずれも上上吉の位付を獲得した女方達である。これは位付の高い役者ほど詳細に評されることの影響もあるだろう。しかしそれ以上に、先にも記述した鳥越の指摘、即ち種々の「事」を演じられること若しくは自分一己の「事」を獲得していることが名優の条件であったことを踏まえれば、位付の高い役者は当然「やつし事」にも取り組んだのであった。しかし彼等の陰には「やつし」で評される評を多くは持たないものの、確かに「やつし」に取り組み、その様子が評判記に記された多くの役者達が存在する。勿論低い評価をされた者も含まれているが、彼等も「やつし」に取り組んだ役者であることは評に現われている以上疑いなく、逆に「やつし」が多くの役者が獲得を目指した重要な要素であったことを示していると言えよう。

年代ごとの変遷を確認すると、貞享末年までに四回・三件、元禄四（一六九一）年から元禄十（一六九七）年の六年間に二十二回・二十二件、元禄十一（一六九八）年から十七（一七〇四）年までの六年間に八十五回・六十四件、宝永元（一七〇四）年から正徳二（一七一一）年までの八年間に三十六回・三十一件確認できる。元禄十年代は元禄歌舞伎期の中でも特に充実した時期であり、狂言公演回数が増加や評判記記述の充実等の影響があることは考慮すべきだろうが、それでも圧倒的な件数を誇る。また女方

の「やつし事」の初は既に述べたように元禄七（一六九四）年だが、この時は江戸の女方にしか用いられなかった。上方でも女方に「やつし事」の語が採用されるのは元禄十一（一六九八）年からであり、この事実からも女方の「やつし」は元禄十年代が盛時だったと言いうことが出来る。

続いて、女方の「やつし」の具体的内容を検討する。評判記の評文を元に「やつし」の内容を分類し、それぞれの特徴を確認していく。分類についてはひとまず先行研究に倣い、続く濡れ事を盛り立てる「ぬれのやつし」と生業としての「土農工商のやつし」に加え、佐藤が提唱した「手法のやつし」の三分類に従う。

(一) 手法のやつし

佐藤は「手法のやつし」を指摘する。これは能・能狂言や舞曲、浄瑠璃の撰取を経て生まれた「やつし」を指すと言う。さらにそれは「評判記にみる「替わった思ひ付き」や「新しきしだし」という新鮮な趣向のためにある。それが新奇を目指すことは同時に本格からの逸脱を意味するだろう。手法としての「やつし」は「新あさまくづしの狂言」の「崩す」とか「小国歌舞妓の直し物」といった「直す」と同義で、狂言を仕組むにあたり、新しく面白く見せるために「やつす」のである」と述べている。²³

対象評判記の女方の「やつし」の内、「手法のやつし」と判断できたのは八名の役者の評で、十回・九件のみだった。数は少ないものの、「やつし」が評に現われる最初期から対象時期の終わ

りまで継続的に確認できることが特徴として挙げられる。特に寛文六（一六六六）年頃と推定される『難野郎古た、み』玉村吉弥評（一〇七九）²³は、既に述べたように評判記に現われる「やつし」の内最も早いものである。これは能の風儀をやつす、つまり崩したり当世風にしたりすることを指したものであるが、他にも上村辰弥評（一一五八）「大やつしの歌」や上村吉三郎評（二五三二）「邯鄲の能をやつして」など能に關わる「やつし」が確認出来る。能以外のものでは、例えば芳沢あやめ評（一四九一）は「助六のやつし」をしたとするし、山下亀之丞評（四五五五）は他の歌舞伎役者の演技をやつしたとしている。これらは全て「〇〇をやつす」と言い換えることが出来、歌舞伎に取り入れられ当世化された本間事や趣向取り・狂言取りの説明を担っていると考えられる。このような本間事や趣向取り・狂言取りが評判記で「やつし」の語を用いることが出来ると認識されていた点は「やつし」とは何か考える上で示唆的であろう。

また百合若という通常立役が演じる芸を女方のものにした「女百合若」を「やつし」の語で説明している谷島主水評（一四九一）は興味深い。「女百合若」のような例は「女鳴神」「女暫」など多く存在する。今回は、「やつし」の語がこのようなものを指す事例は一件しか確認出来なかつたが、この例のように「やつし」の外縁部に近いと思われる事例について詳しく検討すること、「やつし」の姿がより明瞭になる可能性がある。

（二）士農工商のやつし

「士農工商のやつし」は荻田・板谷により提唱された生業としての「やつし」である。対象評判記の女方の「やつし」の内、「士農工商のやつし」に分類できると考えられるものは八十回・六十三件あり、女方の「やつし」の半分を占めることになる。役者についても三十四名がこの「やつし」に取り組んでおり、女の「やつし」に取り組む役者の六割近くにあたる。「士農工商のやつし」は元禄十（一六九七）年以前には三回・三件しか抽出できず、元禄十一（一六九八）年から十七（一七〇四）年までに五十二回・三十五件、宝永元（一七〇四）年から八（一七一）年までに二十五回・二十四件確認出来る。この量感からすると評判記評文からは「やつし」の種類の識別が適わなかつた評の中にも多く存在すると推測される。立役の「やつし」が坂田藤十郎をはじめ「ぬれのやつし」に代表されるのに対し、女方の「やつし」を象徴するのは「士農工商のやつし」であると言えるだろう。

「士農工商のやつし」で注目すべきは何にやつしているかという点である。「やつし」の語が指していた生業を抽出すると、最も多かつたのが諸職業への「やつし」で、女馬子、女方の駕籠かき、髪結い、女医者、乳母、下女等が挙げられる。下女や奉公人の演技と結びつく「やつし」も多かつたが、それだけでなく多種多様な職業と「やつし」が結びついていることが確認できた。また「女〇〇」のように敢えて女であることを断る表記がされている職業も多く、それらの職業において女性が稀であつたことを示

すと推測される。「やつし」は狂言の中に取り込まれる以上面白さ、意外性を求められる要素があったと思われ、女として珍しい職業が登場することはその欲求を満たすことになったのかもしれない。

次いで多かったのは下賤の女房や娘等で、これらは牢人の女房、鍛冶屋女房のように表記され、自分では特定の職業を持たない者であると考えられる。

次に女性的魅力に関わる生業として湯女、茶屋女、出女、夜発等の下級女郎、妾等が確認出来た。女方の「やつし」ではこの女性的魅力に関わる「やつし」が多いのではないかと予想したが、これは三番目に多いものであり、意外な結果となった。

他に「やつし」と関連付けられていた者として乞食や非人、怨霊なども確認出来た。

しかし女性的魅力に関わる生業の「やつし」が少なかつた要因は何なのだろうか。この点については元禄十五（一七〇二）年『役者二挺三味線（江）』沢村小伝次評②⑤が示唆的である。ここには「普通の女方はそれぞれ「やつし」に取り組みはするけれど、色に差し障りが出て人気を損ねるのを懸念して、豆腐などを買って行くような「やつし」には取り組んでも、夜発のような醜く汚らわしい「やつし」に取り組むことには躊躇する」とある。つまり下賤の職業やその女房への「やつし」は比較的取り組みやすい「やつし」であったために多く確認出来、夜発をはじめ身を売るような「やつし」は取り組みにくい「やつし」であったため、そ

もそも役者が限られ、結果的に少なくなつたのだと考えられる。

さて、この沢村小伝次評はもう一つ興味深いことを記している。それは「色」についての記述である。ここでは「色」を捨てて取り組むために、下賤の「やつし」が良く出来てると述べられている。歌舞伎における「色」は「色気」「好色」に通じる「色」であり、男女の色恋沙汰・情事など、情愛の世界や当事者たちの心情・情趣をいう言葉とされる。評判記中には「やつし」に関する他評においてもこの「色」についての記述が散見される。例えば芳沢あやめ評には「やつし」の出来が良すぎるために「色」がないと記述され、浅尾十次郎評などには色を損ねては困ると作者側が「やつし」に取り組むことを規制していると記される。しかし何事をも出来ること、自分一己の「事」を獲得していることが良しとされた時代、多くの役者が「色」を損ねては困るが「やつし」の演技も習得したいと考えただろう。その結果、瀬川竹之丞評のようにできるだけ綺麗に装って「やつし」を演じようとする役者もいた。しかしそれは中途半端で下賤らしくなく、「やつし」の出来はよくないと評せられることになる。「やつし」の演技を賞賛される役者になるには、乞食の姿を得意芸とした中村千弥評③④にあるように「色」への障りを恐れず挑まなければならなかった。

女方の「やつし」が立役に比して少ない理由は、この「色」にあると考えられる。女方の名優芳沢あやめの芸談にも「女形は色がもとなり」とある通り女方は「色」を重視する役柄である。既

に述べたように醜さ、汚さは「色」の対極に位置するものであり、あまりに良く「やつし」の役の姿をうつしすぎると「色」を害してしまう。その微妙なバランスもあり、そもそも「男が演じる女の役」という複雑さを持つ中で「女らしくない」役柄である「やつし」を演じる事は更に複雑化し、難しいものであった。従って、そのような難しい役に「色」を損なうというリスクをとってまで取り組もうとする役者は当然立役より少なくなり、会得できた役者もまた、少なくなった。

(三) ぬれのやつし

「士農工商のやつし」と並ぶ「ぬれのやつし」はその後続く濡れ事を盛り立てるための「やつし」である。「士農工商のやつし」ではその性質上「色」への障りの問題があった。では「ぬれのやつし」はどうか。服部は「色」は「女から惚れられること」「女に惚れること」をその本領とする。その意味で「濡れ」と同意であった³³。と述べる。そうであるならば「色」に障りのない「ぬれのやつし」は女方の「やつし」に多く登場するののか。

結果として、「ぬれのやつし」と判断出来るものは十三件しか確認できなかった。この内「ぬれやつし」等の語で抽出したのが六件である。内容から「ぬれのやつし」と判断できた七件を確認すると、殆どが茶屋女・出女・下女などに「やつし」、その後夫や許嫁などに出会った末濡れ場へ続くものだった。つまり立役の「ぬれのやつし」の典型が「零落した姿に身をやつし、女性（傾

城)に逢いに行く演技」であるのに対し、女方の「ぬれのやつし」の典型は「茶屋女・出女・下女等に身をやつす中で夫や許嫁等に出会う演技」と言える。ただしここで注意するべきは女方の「ぬれのやつし」は、「士農工商のやつし」を演じる中で「ぬれのやつし」の演技が行われることが明確な点である。これこそが「色」に障りがなければずの「ぬれのやつし」が女方の「やつし」に少ない要因と言えよう。つまり「ぬれのやつし」に取り組む女方はまず「士農工商のやつし」に取り組む難しさを抱えることになる。既にそのバランスが難しく「色」に障りある「士農工商のやつし」に取り組んだ上で、「色」を存分に見せる濡れ場を演じるといふ、もはや対極にある演技を一度に見せなければならぬ女の「ぬれのやつし」は、ただの「士農工商のやつし」以上に困難な演技であったことが想像に難くない。このような要因から、女方の「ぬれのやつし」は、女方の「士農工商のやつし」以上に顕著に少ない演技となったと考えられる。

四. 若衆方の「やつし」

女の「やつし」は色に関わり、色を阻害する悪影響があるために忌避される傾向にあることが前章でわかった。そうであるならば若衆方はどうなのだろうか。

若衆方とは美少年に扮する役柄の者を言い、江戸時代には「若女方」と対照される役柄で、成立当初からの伝統である衆道的な

要素をただよわせる特殊な役柄であるとされる。つまり若衆方もまた「色」が重視される役柄なのである。彼等の「やつし」はどのようなもので、どのような状況にあったのだろうか。

若衆方の「やつし」を抽出し、まず判明するのはその少なさである。全十七回・十六件、役者としては十一名の評に現われるのみであった。また若衆方小島平七評（三四五八）に「やつし」の語が見えるが、この評は役としては「女」であるため純粋な若衆方の「やつし」とは言い難い。さらに「やつし」の語が現われる期間も短い。元禄六（二六九三）年『雨夜三益機嫌』鈴木平七評（一四四四）に最初に見え、最後に見られるのは元禄十六（一七〇三）年『役者御前歌舞妓』山下才三郎（三三八二）、小島平七（三四五八）評で、その後宝永年間には一切見られない。女の「やつし」は宝永・正徳期まで続くにも関わらず、若衆方の「やつし」は、実に十年間という短い期間にのみ現われるものだった。

この理由を探るべく、女の「やつし」と同じく評判記の記述を参考に若衆方の「やつし」を検討する。なお若衆方には「手法のやつし」と判断できる評はなかった。「ぬれのやつし」と判断できるものも殆どが「ぬれやつし」「色やつし」など語でしか確認出来ず具体性がない。従って本稿では「土農工商のやつし」と判断できるものについて詳しく検討する。

若衆方の「やつし」のうち「土農工商のやつし」と考えられるのは小野川宇源次の揚屋の息子及び巾着切の三五郎（二二一

四）、早川平治郎の馬かた小八（二二八三）、尾上弥太郎の馬子（二五九〇）、そして山下才三郎の馬かた六蔵（三三八二）の四件である。

絵入狂言本が確認でき、さらに詳しい内容がわかったのは小野川宇源次評の巾着切の三五郎の「やつし事」である。該当狂言は元禄八（一六九五）年三月京都早雲座で上演された「けいせい阿波のなると」である。小野川宇源次演じる巾着切の三五郎は、主人の零落の際にも一人仕え続け、「恋を混せてのご奉公」をしていた若衆であり、主人のために巾着切して捕まった。ある日追善に伴う恩赦で、坊主に成れば罪を許し牢から出してやると言われるにも関わらず「前髪を落とすかは主人に問わなければならぬ」と言ふ。ここで坊主にされるくらいなら牢屋に戻る方がいいと言ふ。この「やつし」の特徴は、牢屋に入れられた罪人という視覚的に決して美しいとは言えない状況にありながら、若衆としての矜持や主人への一途さを押し出すことで、見物を落胆させないどころか逆に胸を高鳴らせるような「やつし」になっていることである。この「やつし」に代表されるように、若衆方の「やつし」の第一の特徴は、例え視覚的に差し障りがあっても「色」の本質部分には害の無いように多分に配慮されている点であると指摘できる。

「土農工商のやつし」の中で多く確認出来るのが馬方・馬子への「やつし」である。馬方・馬子とは乗り物や物品の輸送などに用いられる馬を引くことを生業とする者で、彼らは時に旅行者を

恐喝したり暴利をむさぼったりすることがあり、浮浪の駕籠舁と同視されたという。このような身分は若衆に演じさせるには適さないように思われる。実際、馬子を演じる事をよしとしない評が確認出来る。元禄十二年『役者口三味線(坂)』早川平治郎評(二二八三)には、次のようにある。

「女大臣こたへ」やつしがようござんす。当初狂言に馬かた小八となつて彦右衛門殿との話が馬子によううつりますますござんせぬか「水だて又云」されば馬子によくうつりませ程・迷惑にござる。大事のお若衆を、馬子に其ままとは聞きにくうござる。殊更なんぼ馬子をうつさるといふても、若衆方の短い煙管で、煙草まいるも、さりととは似合わぬ事のやうに存る。女方などは、傾城事の口説に、煙草をのまるるが、是はかへつて見よい物でござる。若衆はくさい物の類。煙草は第一忌む事でござる。女方は女を似せたものでござれば、煙草をまいつても苦しからず。

ここでは、馬子になる「やつし」の姿が良く演じられているが、それは迷惑な事だというからやはり若衆の色を害することが懸念されていると読み取れる。注目すべきはその後の女方と若衆を比べた評文である。ここでは「女方は女を似せたものであるから煙草をのむようなことをしても良いが、若衆方には似合わないものであり、煙草のようなくさい物の類は忌避すべきである」と言わ

れている。ここでは煙草が例に挙げられているが、この煙草はそのまま「やつし」に置き換えることが出来るのではないかと。

即ち女方はあくまでも男が「女」を似せて作り上げたもので、役者が生まれついて持っているのは男性的原理であり、役者の持つ身体の形がそのまま役となったものではない。従つて女方は「色」を害す煙草や「やつし」に取り組んでも大きな問題はない。あくまでも作り物であるからである。対して若衆方は、役者が生まれついて持っている身体の形をそのまま役としたものである。そのような作り物ではない、正真性を魅力とする若衆方は、「色」を害す煙草や「やつし」に取り組むことにより直接的に魅力が傷つけられてしまう。そのためそれらを忌避するべきだとされたのである。そして、これはそのまま若衆方の「やつし」が少なく、また期間も短かったことの要因と見ることが出来るだろう。

五. おわりに

本稿では「やつし」研究が従来立役に集約され、立役以外の「やつし」が明らかにされていないことを問題として提起し、まず立役以外の役柄の「やつし」の状況を確かめた。結果立役以外にも「やつし」に取り組んだことが確認出来、特に女方は立役に次いで多く「やつし」の語で評され、演技パターンとしての「やつし事」も獲得していることがわかった。

これを踏まえ女方の「やつし」について詳しく検討を行った。

女方は「男が演じる女の役」という複雑さと「色」の重視による制約を抱える役柄である。それ故に「やつし」を演じる際には女方に求められた「色」と、醜さや汚さと結びつきが強い「やつし」のバランスに苦労することになる。このために女方の「やつし」は立役に比べると少なくなつた。

しかしながら、若衆方と比べると、「男が演じる女の役」故に「やつし」に取り組みやすかつたという状況も見えてきた。つまり、身体の形をそのまま役とする若衆方に対し、女方はあくまでも男が「女」を似せて作り上げたものである。従つて、作り物である女方は若衆方よりは「色」に関わる制限が緩和される。それ故に女方は、立役ほどではなくとも、多くの役者が「やつし」の演技獲得に挑戦することができたと考えられる。このことが立役以外の役柄の中では最も多い件数を確認出来た結果に繋がつただろう。

今回は「やつし」がその時代の象徴ともなつた元禄歌舞伎期を中心に調査を行ったが、これ以降の「やつし」の動向についても今後調査が必要である。正徳に入つても「やつし」は評判記に多く登場する語であり、また舞台でも例えば正徳五（一七一七）年二代目市川团十郎が虚無僧の「やつし」を見せているように、新たな「やつし」の展開があつたことがわかる。これが女方をはじめ他の役柄にも取り入れられた可能性は充分にあり得る。このような正徳二（一七一二）年以降の新たな展開については今後の検討課題として考えたい。加えて、本稿では地域・位付ごとの、ま

た立役・女方・若衆方以外の役柄の「やつし」の特徴と変遷についても述べる事が出来なかつた。これについても稿を改めて論じたい。

本研究により、これまで光が当てられてこなかつた女方の「やつし」の状況を明らかにすることが出来た。立役だけでは無く、全ての役者が「やつし」に挑んだという事実こそ、「やつし」が元禄歌舞伎期を象徴する芸となつた要因に他ならないのではなからうか。

注

(1) 今尾哲也「第三章 ヤツシ・ヤツシ事とは」『歌舞伎の根元』勉誠出版、二〇〇一年、四十四頁

(2) 佐藤恵里「元禄歌舞伎 江戸」『歌舞伎・俄研究 資料編 室戸市佐喜浜町俄台本集成』新典社、二〇〇二年、三十八頁

(3) 郡司正勝「かぶき戯曲の構造と発想」『かぶきの発想』弘文堂、一九五九年

(4) 乘岡憲正「やつし考―再開譚における―」『古代伝承文学の研究』桜楓社、一九六七年

(5) 注(2)に同じ

(6) 今尾哲也「第八章 ヤツシ・ヤツシ事をささえた社会条件」『歌舞伎の根元』勉誠出版、二〇〇一年

(7) 土田衛「大和屋甚兵衛の芸風」『考証元禄歌舞伎―様式

と展開』八木書店、一九九六年

- (8) 荻田清「藤十郎のやつし」その陰にあるもの―『文学・語学(八〇)』全国大学国語国文学会、一九七八年

- (9) 注(8)に同じ

- (10) 板谷徹「所作事の成立とやつしの思想」『舞踊学一九八一(四)』舞踊学会、一九八一年

- (11) 近石泰秋「第八章 やつし」『操浄瑠璃の研究その戯曲構成について』風間書房、一九六一年

- (12) 注(2)、四十四頁

- (13) 今尾哲也「舞曲扇林」『歌舞伎事典』平凡社、一九八三年

- (14) 早稲田大学図書館所蔵本 チ13.04717.0002に拠る

- (15) 郡司正勝「かぶきの役柄の発生」『共立女子大学文学芸術研究所研究叢書第五冊』共立女子大学文学芸術研究所、一九六二年・「かぶきの役柄の解体」『共立女子大学文学芸術研究所研究叢書第六冊』共立女子大学文学芸術研究所、一九六四年(再録)・「かぶきの役柄・発生・解体」『郡司正勝刪定集第二巻傾奇の形』白水社、一九九二年)

- (16) 現存最古の評判記は主に男色の対象として評判が記された万治三年(一六六〇)刊の『野郎虫』であり、主に役者の芸芸を対象とした役者評判記は貞享年間からはじまる。元禄年間にはほぼ定型が完成すると、それは江戸末期まで続いた。歌舞伎役者に対する芸評を主とし、各役者の経歴・

元禄歌舞伎のやつし

芸芸・人気等を示すとともに、演技・演出の実態を探る資料となり、台本の伝存しない狂言の内容を知る有効な手がかりとなる。定型は黒表紙小型横本で京・江戸・大坂の役者評を各一巻とする三都三巻三冊の編成になっている。本文では立役・敵役・若女方などの役柄別に、芸芸の巧拙や人気の高下による序列に従って配列された役者の芸評を述べる。評判は合評形式で賞賛・非難をとりまぜ、読者の幅広い思いを先取りすると同時に公平を期す形式になっている。(赤間亮『図説江戸の演劇書』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、二〇〇三年・赤間亮「役者評判記」『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九年・松崎仁「役者評判記」『歌舞伎事典』平凡社、一九八三年)

- (17) 「やつさ」「やつし」「やつす」「やつせ」、また漢字表記で「婁」「侷」「省」「略」

- (18) 寛文六(一六六六)年頃「難野郎古た、み」玉村吉弥(一〇七九)「のうのふうぎ見事にてちまんらしくみゆるなりすこしりやくしだてに御やつしなされ候は、二町のうちにはなく候」

- (19) 以下評判記の引用については巻数とページ数を合わせた四桁の番号で記し(〜)で括る。例えばこれは上村辰弥評であり「歌舞伎評判記集成第一期」一巻一五八頁にあるため番号は(一一五八)となる。

- (20) 「事」とは演技・演出上の局面や役々の演技類型を指す

言葉であり、「怨霊事」「濡れ事」「お姫様事」「所作事」などのように使われる。元禄末年までに出版された役者評判記の中には百種近い「事」の名称が登場しているという指摘もある。(服部幸雄「演出―その虚と実」『歌舞伎ことば帖』岩波書店、一九九九年)

- (21) 鳥越文蔵「役柄の分化―元禄時代の推移について―」『共立女子大学文学芸術研究所研究叢書第五冊』共立女子大学文学芸術研究所、一九六二年(再録)、『元禄歌舞伎攷』八木書店、一九九一年)
- (22) 佐藤恵里「やつしと歌舞伎」『図説「見立」と「やつし」―日本文化の表現技法―』国文学研究資料館、二〇〇八年
- (23) 注(2)、四十四頁
- (24) 注(18)に同じ
- (25) 元禄十五(一七〇二)年『役者二挺三味線(江)』沢村小伝次(三三四六)「色をすて、の働ゆへ。下賤のやつし事よくうつり侍る。(略)大かたの女方、やつしはそれ／＼にめさるれ共、お子のそこねるをきのどくがりて、たうふなど買にいたり、夜発などには思ひ切て得なられぬ。身をかばはる、によつて、おのづからやつしうまふはうつしの。身にはまつてなざる、ゆへに、かくべつうつりよくおもしろし。芸を見やうなら此君でござる」
- (26) 服部幸雄「役の深化」『歌舞伎ことば帖』岩波書店、一九九九年、一六八頁
- (27) 元禄十三(一七〇〇)年『役者談合衝(京)』芳沢あやめ(三四〇二)「第一うれいやつし。諸事の芸、一から十迄わるしといふ人なし。しかれ共時により、余り狂言にうつり過て、女かたに色がなふてきのどく」
- (28) 元禄十五(一七〇二)年『役者二挺三味線(京)』浅尾十次郎(三三〇二)「やつし事うつらず。(略)▲大臣曰
おろかな事をいふ、やつし事はよういたさるれ共、下賤の
手業の、手鍋さげる程に身をやつさるれば、色のさばりに
成ゆへ、作者の智恵でそこらをよけるゆへ、それだけうつ
りかひなき分也。」
- (29) 元禄十五(一七〇二)年『役者一挺鼓(京)』瀬川竹之丞(三三三〇)「其位備り、下賤のわさうつらず(略)今すこしふん切て、ぐはい／＼と芸をさしましたい。色を思はる、故に、粧ひ多くして、下さまのやつし、うつくし過て移ぬかと思はる、也」
- (30) 中村千弥は元禄十五(一七〇二)年竹嶋幸十郎座「丹波国血汐乃水風呂」で乞食を演じその名を知らしめ、以降それは彼の当り役となる。近藤瑞男「元禄歌舞伎の世話狂言―中村千弥の場合―」『歌舞伎―研究と批評―』六「歌舞伎学会、一九九〇年(再録)、『元禄歌舞伎の展開―甦る名優たち―』雄山閣、二〇〇五年)に詳しい。
- (31) 宝永二(一七〇五)年『役者三世相(坂)』中村千弥

（四〇九七）「尤くらゐを取て哀をする衆はお、けれど、世話にて姿をやつし、色をすて、見物涙に成、やつこが作りひげもおちるは、此度にて二度の大あたり」

（32）今尾哲也「「あやめくさ」抄」『変身の思想』法政大学出版局、一九七〇年

（33）注（26）に同じ

（34）服部幸雄「若衆方」『演劇百科大辞典 第六卷』新装復刊、平凡社、一九八三年

（35）近松全集刊行会「けいせい阿波のなると」『近松全集第十六巻影印編』岩波書店、一九九〇年

（36）助野健太郎「馬子」『日本風俗史事典』日本風俗史学会、一九七九年

〔謝辞〕

本稿は卒業論文を元に、第六十四回立命館大学日本文学会（二〇二〇年十二月六日）における口頭発表を経て、加筆訂正したものである。また資料として、赤間研究室のテキストアーカイブを活用した。研究の遂行にあたり御指導、御協力頂いた皆様に心より御礼申し上げます。

（とつか・しおり 本学博士前期課程）